

国立民族学博物館蔵篠田統文庫図書目録

著者	石毛 直道
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	002
ページ	iii-857
発行年	1986-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10502/3407

編集にあたって

図書館等で公共の用にそなえるべく収集した図書の分類と、個人が収集し、利用してきた蔵書目録の分類は、本来は別の原理にもとずいてなされるべきであろう。

身長178cmの先生が机の前に座るといっばいになってしまう小さな書齋につづく書庫はタタミの部屋とその延長上の板の間にぎっしりと本棚を並べ、そのあいだにかろうじて人が通れるスペースを空けたものだった。本棚のおおくは、物資欠亡時代にありあわせの板きれで手造りされたものらしかった。整備された書庫からは、はるかにかけ離れたものであったが、そこに並べられた図書は先生なりの方法での分類、整理がいきとどいていたようである。雑談のさいちゅうに書庫へ入って、話題に関係ある本をすぐさま取りだしてこられることがしばしばであった。

理想をいえば、篠田文庫目録での図書の分類や排列はかつての書庫の本棚での本の並べかたを再現するものであるべきだと考えられる。本の並べかたそのものが、先生なりの知識の整理法や、興味を持たれた分野とそのひろがりなどをしめしているからである。

だが、蔵書をお引き取りするさいにそこまでの配慮がまわらず、先生の書庫での排列がくずされた状態で博物館に受入れた。そこで、この目録では一般的な分類方法を採用せざるを得ない。

この目録は、一般図書、洋書、和本、漢籍類（朝鮮旧書をふくむ）の4部にわかれている。この4部の区分けの規準とそれぞれの部内における排列法はつぎのとうりである。

1) 一般図書

2), 3), 4)以外の図書をしめす。洋装、活字体の和書がほとんどであるが、孔版印刷、および明確にコロタイプと判断できる図書、および清朝以後の中国、朝鮮半島で成立、出版された活字図書をこのなかにふくめる。

なお、データ・ベース整理の都合で3), 4)に入っている分が、少数ながら重複して、1)に含まれている場合がある。

分数・排列は日本十進分類法(NDC)新訂8版によっている(分類綱目表を参照)。同一分類項目内では本館の文献図書のデータ・ベースに入力された順に排列している。

2) 洋書

1)とおなじ原則で分類，排列している。

3) 和本

洋装本ではなく，手書き，あるいは版木で印刷された日本人の著作になる図書のことである。卷子本，折本もこのなかにふくめているし，印刷物に手書き原稿を加え，和綴じで合本したノート形式の文献も，和本の部にふくめた。日本人が注釈を付した中国の古典等も和本の部であつまっている。上記分類規準に該当する複製本もふくめることとし，わかるかぎりの書誌的注記を付しておいた。

凡例にみられるように，本館の文献図書のデータ・ベースに入力されている以外の書誌的注記を加えてある。

1)とおなじ分類，配列である。

4) 漢籍（付朝鮮旧書）

清朝末年までに成立した漢文，中国語書籍を収録し，中華民国初年（1912年）以後の図書は1)一般図書のなかにいれることとした。清朝末年以前に成立した書とは，刊本（版本）については同年までに印刷，刊行された書籍，写本（鈔本）については同年までに筆写されたものである。また，同年までに著作されたことがあきらかな書籍をふくんでいる。おなじく，朝鮮半島において著作された図書については，季朝末期（1910年）までに成立した書籍をふくんでいる。

分類，排列は四部分類によっている。整理の実際にあたっては，原則として『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』（昭和38年京都大学人文科学研究所刊）に従い，また，『京都大学人文科学研究所漢籍目録』（昭和54年京都大学人文科学研究所刊）を参考とした。人文科学研究所方式を採用したのは，同目録刊行以後に編集された主要な漢籍目録がこの方法を踏襲しているという理由もさることながら，篠田先生が京都大学人文科学研究所と深い関係をもちながら研究されてこれらので，同目録の方法にならうことが，今後の利用者にとっても妥当であろうと判断したためである。

なお，叢書の部類に関しては，以下に述べるように処理した。原則としては，叢書中の各書籍を，經，史，子，集のいずれかの部門に分類して収めてある。一括して取りあつかうべき全部数のそろっている叢書が，比較的少ないからである。ただし，「叢書部」に収めているいくつかの叢書の中で，特にその「第一雑叢類」に含まれている，『古今説海』，『漢魏叢書』，『学海類編』の各叢書については，その書目をあえて個別に立てて分類することをしていない。整理の都合上，煩瑣

を避けるためである。それらの書目については、「書名索引」および「著者名索引」にのみ、該当する項目をあげている。

李朝末までに朝鮮半島で成立した図書は、漢籍の部の末尾に、一括して、分類せず、年代順に排列してある。冊数がすくないので、分類せずとも容易に検索可能であるし、中国の漢籍から独立させたほうが、利用者の便宜に資するであろうと考えたからである。なお、その整理にあたっては李盛雨著『韓国食経大典』（1981年ソウル郷文社）を参照した。

本館の文献図書のデータ・ベースに入力されている以外の書誌的注記を付してあるが、その作業にあたっては、人文科学研究所の漢籍分類目録および漢籍目録を全面的に参照している。

なお、本目録は分類目録なので、その排列順序は、本館の書庫内における図書の配置場所や書架における排列順序とは無関係であることに留意されたい。この目録に記載された書籍を利用するさいには、本館図書室において排架場所を検索することが必要である。

また、この目録は、雑誌をふくんでいない。目録作成にあたっての基本的資料となった文献図書のデータ・ベースに雑誌が入力されていないなど、いくつかの理由によって、この目録からは雑誌を除外することとした。また、篠田先生が収集された雑誌類は比較的すくなく、また、他の図書館等で閲覧しがたい特殊な雑誌はふくまれていない。

一般図書、洋書の目録は文献図書のデータ・ベースの記録を基本とし、作成されているため、データ・ベースにおける記載事項に形式の不統一がある場合はこの目録にもそれが反映され、形式が整備されていない面がある。ただし、データ・ベースにおけるあやまりは極力修正したつもりである。

なお、以上の作業は、昭和60年度における国立民族博物館の文献図書資料データ・ベースに依據しておこなわれたものである。将来、データ・ベースそのものの変更等がおこなわれる可能性があるが、その場合には、本目録の利用者が、当館において図書の検索をする時に、本目録の記載事項と多少の相違を生じていることもあり得る。